

ラジオ放送からみた1956年ハンガリー動乱

星 乃 治 彦

—Hungarian Revolt in 1956 in view of the Radiobroadcast—

本稿は、1989年まで東欧地域に広がっていた社会主義体制が果たして民衆にとって何であったのか考察する作業の一環である。ここではとくに1956年のハンガリー動乱をテーマとしたい。ハンガリー動乱の重要性についてここであらためて論じることは必要なかろう。国内の改革派が主導して独自の道を歩もうとしたハンガリーに対して、それまで侵略することがないと考えられていた社会主義国ソ連が、公然と武力で介入したのである。その意味で1956年のハンガリーは、1968年の「プラハの春」や1980年「連帯」の運動などの先鞭をつけた事件であった。ハンガリー動乱時に見られた民衆と社会主義体制間の関係や、東欧の各国政府とソ連との関連などは、これ以降1989年まで繰り返し提起されるテーマだった。ただ、1956年秋のハンガリーの事態を「ハンガリー事件」と呼ぶと、短期の一過性のものにとらえられがちだし、「ハンガリー暴動」では当局側の価値観が入っているので、ここでは「ハンガリー動乱」と言うことにする。

この「世界を揺るがした13日間」のハンガリー動乱の推移は事件直後から、関心が高かっただけにかなり詳細な研究ならびに各種史料集が出されている。⁽¹⁾ その後、たしかに、1989年以降それまで封印されていたブダペシュトやモスクワの文書館史料の開放に伴って史料状況は変化し、ガティなどの研究が、ソ連のハンガリー動乱への本格的介入が最終的に政治決定されたのは、従来言われていた30日ではなく、31日の早い時期だと主張しているが、しかし、だからといってこれまで明らかにされてきた事件の概要が根本的に変わったわけではない。⁽²⁾

ここでは、民衆史のレヴェルから歴史を再構成する立場から、動乱の最中、政治的指導部の動向を果たして民衆がどう見ている、どう考え、どう反応したのだろうか、という点に注目したい。とくに、当時当局にとっても民衆にとっても最も重要なマス・メディアであったラジオ放送に注目しよう。ラジオ

オ放送はこの変動の中でどう変貌していったのだろうか。後述のように、ハンガリーのラジオ放送は単に体制側のメディアから民衆運動を背景に民衆の声を代弁するようになり、さらには民衆自身がラジオ放送を始めるように劇的に変化する。民衆が簡単に放送を開始できるところが今のテレビと異なるところである。こうしたラジオ放送の軌跡をヨーゼフ・ゲルト・ファルカーシュが学生運動の動きを中心に追っている。彼は、ブダペシュトを中心にしたラジオ放送をテープレコーダーに録音したものを編集し、ドイツ語に翻訳しており、ここでの手がかりを与えてくれている。⁽³⁾ ここではこのファルカーシュの史料の中からいくつかの代表的ラジオ放送を選び出し、それとその他の研究書を並行させながら、当時の動乱の一日一日を再現したい。なお、日誌風に構成された本文の前でその日の大まかな動向を説明し、本文の後にはその日のラジオ放送の特徴を述べているが、それらを含め文中 [] の中は筆者による説明文である。

1.

第二次大戦後、ソ連の強力な干与の下に、東欧には人民民主主義体制が誕生した。その後しばらくは、東欧各国の独自路線をソ連は容認していたが、「冷戦」が進行するにつれて、とくにスターリンの晩年、その余地はほとんどなくなっていった。その過程の中で、政権党の中で独自路線を主張する民族派とソ連をモデルとするソ連派が激しく対立するようになった。国際関係のレベルでこの対立は、ソ連とユーゴスラヴィアの間の対立となって象徴的に現われた。⁽⁴⁾

ユーゴ以外の東欧諸国では、ソ連派が民族派に対して優位に立ち、民族派をスパイだとする冤罪事件が相次ぎ、民族派が一掃された。そして、ソ連をモデルとする農業の集団化と重化学に傾斜した急速な工業化が図られたのである。ハンガリーでのこうした冤罪事件は、元内相ライクをスパイとしたライク事件である。

だが急速な「社会主義化」の無理は、すでに1953年3月のスターリンの死前後から表面化し、東ドイツではいち早く1953年6月17日を中心に民衆が抗議運動に立ち上がった。ハンガリーでも、1953年7月から55年の4月にかけて民族派のナジ・イムレが首相となり、とくに農業分野での行き過ぎの是正を図った。しかし、こうした路線転換は、スターリン以後のソ連共産党指導部の不安定さを反映して、まだ確固としたものではなかった。実際に、55年4月ナジは解任され、一時期ラーコシ第一書記を中心とする保守派が巻き返

しに成功したのである。その後「非スターリン化」が再び本格化するの、56年2月ソ連共産党第20回大会でフルシチョフがスターリンを批判するのを待たなければならなかった。

このフルシチョフの有名な「スターリン批判」にはじめに反応したのは、ポーランドのポズナニの労働者であった。こうした民衆の抗議運動を背景にポーランドでは1956年10月19日に民族派で長らく獄中にあったゴムウカが政権党の第一書記に復帰した。⁽⁵⁾ こうしたポーランドの動きを強く意識して、ハンガリーで学生が動き出したのが同じ10月22日のことであった。ただ、10月22日には、ハンガリー国内における若干の前史があった。

ソ連共産党20回大会直後の3月17日、討論クラブとして1848年革命の愛国的民衆詩人の名前を冠した「ベテーフィ・サークル」が政権党ハンガリー勤労者党内に設置されたが、このサークルはしだいに知識人・学生の体制批判の中心へと展開していった。とくに、6月28日にポーランドのポズナニで労働者の抗議運動がおこると、ますますその勢いは増し、思想の自由の回復や冤罪事件の名誉回復やラーコシの責任を追及するようまで発展した。こうした中で7月17日にはソ連共産党からミコヤンとスースロフがブダペシュトを訪問し、そしてついに7月18日から21日までの党中央委員会においてラーコシは解任され、ゲレーが後任となったのである。そして10月9日には30万人の市民が参加して冤罪で処刑されたライクの国葬が行われたりしたが、同じ保守派のゲレーでは、事態は収拾できなかった。とくにポーランドで10月19日に民族派指導者でそれまで獄中にあったゴムウカが第一書記に選出されると、ハンガリーでも、民主化運動をさらに進めようとする動きが表面化したのであった。

1956年10月22日 月曜日 [学生の先鞭]

[ブダペシュト工科大学では、学生たちの大規模な集会が開かれ、以下の16項目が要求された。⁽⁶⁾ また学生代表とベテーフィ・サークルの代表が会って、23日午後にベム広場で大衆集会を開くことを打ち合わせている。]

19時50分 (官制放送局ラジオ・コシュート、以下、とくに特筆しない限りこの放送局からの放送。ただし、動乱の中で自己批判して、一時期コシュート自由放送と名称を変更することになる。) 夜のニュースです。青年と民主的世論の熱狂的運動こそがポーランドの事態を生み出したのです。・・・ (ポーランド政権党機関紙)『人民の演壇』は中央委員会決議を次のように

歓迎しています。「これでやっと、我々は働ける」と。

[22日の学生の動き自体はまだハンガリーのラジオでは報道されていない。しかし、ポーランドの状況を伝えるラジオ放送の基調は、ゴムウカの復権に帰したポーランドでの改革を歓迎している。今後とくに運動の初期段階にあってはポーランドとの連帯が強く表明されることになる。]

10月23日 火曜日 [本格的運動の始動]

[ポーランドに連帯する大規模デモが大規模に展開される。15時には、1848年革命の時ハンガリー人とともに戦ったポーランド人の将軍ベム像前で民衆は集会を開き、18時には前日の16項目要求のラジオ放送を求めてデモ隊はブダペシュト放送局前に結集した。それに呼応するかたちで20時にゲレー第一書記が以下のようなラジオ放送を行った。その後21時になると、放送局前で治安警察（アーヴォ）が民衆に発砲したが、ハンガリーの軍隊は逆に民衆に武器を提供し、政府側に立つのは治安警察だけとなった。放送局を中心とした武力衝突がはじまり、スターリン像が引き倒される。こうした中でゲレーはソ連軍に出動要請をし、戒厳令を布告した。]

7時 「おはようございます。ラジオをお聞きの皆さん。今から今日付けの（ハンガリー勤労者党機関紙）『自由な国民』の社説を読み上げます。

『我が国の大学では集会が次から次へと開かれている。・・・こうした青年集会の雰囲気は熱していて、嵐のようである。それは、人工の川床を流れる小川というよりは、むしろ水かさを増した大河に近い。こうした火のような熱狂はいいことである。我々は、ここ数年、こうした大衆的示威運動から遠ざかっていたということを認めよう。セクト主義、スターリン主義的過ちが、どうしようもなく沸き上がってきた大衆の声と大衆運動を感じる我々の感性を麻痺させていたのだ。そして、今日でもなお、見慣れた光景から抜け出すことができずに我々の青年の集会がどうなるものやと気遣い、不信の念を抱いているという人々がいる。我が党とその機関紙『自由な国民』は青年とともにある。党は、こうした青年の集会が賢明で生産的話し合いができて多くの成果を生み出すことを期待している。』

12時53分 （昼のジプシー音楽が中断された）ラジオをお聞きの皆さん。内務省の通達をこれから読み上げます。「公共秩序の維持のために内務省は当

分の間あらゆる街頭での集会、デモを禁止する。内務大臣ラースロー・ピロシュ」

15時1分 本日14時、勤労者党の第6回中央委員会総会が始まりました。中央委員会は、ブタペシュトの青年たちがポーランド人民共和国への連帯声明を発したことを了解しました。さらに中央委員会はデモへの参加を決議しました。それゆえ総会そのものは時間をずらして開催されました。中央委員会は、学生やデモに参加している青年に、ちょっとした挑発行為でも起こさないように要請しています。

20時 ラジオをお聞きの皆さん。今からハンガリー勤労者党中央委員会第一書記ゲレー・エルネー同志の演説をお届けいたします。

「同志の皆さん。友人の皆さん。そしてハンガリーの働く皆さん。・・・私たちが望んでいるのは社会主義的民主主義であって、ブルジョア民主主義ではありません。今日我が人民の敵が躍起になっているのは、労働者階級の権力をぐらつかせることです。・・・彼らはソ連邦を中傷しています。・・・私たちの確固たる確信となっているのは、農業においては社会主義的方法が唯一正しいということです。とりわけ我々のコルホーズを守りましょう。・・・同志の皆さん。労働者の皆さん。重要なのは私たちが社会主義的民主主義を望むのか、それともブルジョア民主主義を目指すのか、なのです。我が党の断固たる立場は、社会主義的民主主義の道を動揺することなく前進させ、展開させることです。・・・」

22時03分 今日の午後ブタペシュトの青年たちは国会議事堂前に行進しました。夕方にはナジ・イムレ同志が青年たちに語りかけました。いまのところナジ・イムレ同志は青年の代表団や多くの国会議員と交渉中です。

〔朝の段階では青年運動への理解がラジオでは表明されている。昼に発表された内務省のデモ・集会の禁止措置は、その後の展開を見るとほとんど実効のあるものではなくなっている。権力の弛緩状況が広がっているとも言えよう。そうした状況を收拾しようと、勤労者党は中央委員会を開き事態の收拾へ向けての動きをはじめている。だが、ゲレーはその午後8時のラジオ演説からもわかるように、旧来の路線に固執している。とくに演説の中の農業方針堅持という主張は、明らかに農業政策の手直しを主張していたナジへの

牽制である。しかしそれにもかかわらず、午後10時のニュースではナジの動向が伝えられるようになっていく。

10月24日 水曜日 [弾圧と慰撫]

[未明、ナジ＝イムレに首相就任要請がなされたが、すでに午前2時にはハンガリーの要請によるソ連軍の第一次介入が始まっていた。しかし、この時は戦車のみであって、威嚇の意味が強かったと考えられる。これに対抗する市民はストライキにはいり、ハンガリー正規軍もこれに合流し、地方でも各地で労働評議会革命委員会が次々と結成された。そして当局と民衆の対決の焦点は、ラジオ放送局の争奪戦へとようになっていく。]

4時30分 おはようございます。ラジオをお聞きの皆さん。朝の音楽の時間を始めましょう。・・・ああ、ちょっとお待ち下さい。失礼しました。お伝えすることがございます。

「ファッション的反革命分子が我が公共の建物に武装攻撃をかけ、我が公安部隊を攻撃しました。秩序を取り戻すために、当分のあいだあらゆる集会と行進は禁止されました。この命令に従わないものに対して、警察と軍隊には法律を厳格に適用するよう指示されました。ハンガリー人民共和国閣僚評議会からでした。」

8時13分 お伝えします。1956年10月24日、ハンガリー労働者党中央委員会は新しいメンバーを選出しました。・・・ナジ・イムレは政治局員にも新たに選ばれました。中央委員会はゲレー・エルネー同志を第一書記として承認し、中央委員会は人民共和国政府にナジ・イムレを首相に任命するよう勧告しました。

10時41分 公共の秩序を回復するために、重要な伝達がありますから、ラジオを窓際に置き、窓を開けはなつようお願いいたします。まもなく、閣僚評議会議長ナジ・イムレ同志の演説をお届けします。

12時10分 こちらはハンガリー人民共和国首相ナジ・イムレです。皆さん。14時までに街頭闘争をやめ、武器をおいて下さい。そうすれば即刻裁判所には行かなくてすみますから。同時に私は我が国の、政治や経済など党や国家のあらゆる領域における徹底した民主化を全力でおし進めることを確約しま

す。その際私が1953年6月に議会に提出した政府綱領をその土台とします。私たちの呼びかけに答えてください。闘争をやめてください。まずもって、最も重要な課題は事態を收拾することです。それから全ての問題についてお話ししましょう。政府とハンガリー国民の多数派は同じように考えているのですから。・・労働者の皆さん。工場や機械を守ってください。・・政府にしたがって下さい。信じてください、我々が過去の過ちから学んでいることを。そして我が国の繁栄のために正しい道を探し出すだろうということ。 (国歌が流れる)

13時26分 今からラジオをお聞きのたくさんの皆さんからのご要望にお応えして、なぜソ連軍部隊がブダペシュトに派遣されたのか、その任務は何なのかについて述べましょう。このソ連軍部隊は、ワルシャワ条約に基づきハンガリーに駐留しているものです。火曜日には我が国民の敵が我が大学生の行進を組織的な反革命敵挑発に転化させ、武装攻撃をしかけ、我が国の秩序と住民の生活を危険にさらしました。責任感を感じ、秩序と安全を確保するためにハンガリー政府は、反革命集団の殺人攻撃を止めさせるのを援助してもらうようソ連軍に要請しました。平和を愛するブダペシュト市民保護のために、ソ連軍兵士は自分の生命の危険をかえりみることなく奮闘しているのです。・・・ブダペシュトの労働者の皆さん。我々の友人であり、同盟者でもあるソ連軍兵士を愛情をもって歓迎しましょう。

14時15分 ブダペシュトの奥さん、お母さん。我が大学生の善意のデモを反革命分子は犯罪的目的実現のために利用しようとしています。・・・奥さん。ご主人を破滅の道に走らせないでください。・・・お母さん。あなたたちの愛情深く育てられ大きくなった息子さんたちを、街頭に、そして死に導く銃の前に立たせないでください。・・・奥さん。あなたやあなたのご家族を誤った道に進ませてはなりません。ハンガリー動労者党と労働者国家を信じてください。ブダペシュト愛国人民戦線婦人委員会でした。

15時10分 ご注意下さい。チェペルからのニュースです。われわれチェペルの自動車工場の労働者は、秩序と規律保持に成功しているとお伝えします。同時に私たちは誤った道に進んだ労働者にも要求します。武器をおき、労働者権力を攻撃するな、と。

18時35分 勤労者党の中央委員会は、武器をまだ手離していない全ての青年に、この恥ずべき流血の事態を終わらせることをよびかけます。君らは間違ったことのために闘ってるのであって、我々の人民や青年のためではありません。むしろ人民、民族そして青年に対して闘っているのです。・・・党とナジ・イムレ率いる政府を助けようじゃありませんか。

20時13分 ラジオ放送局で何が起きているのか。われわれのレポーターの報告です。群集がラジオ放送局の門から押し入って来ました。守衛は消化器で群集を押し戻そうとしました。・・・どうしようもなくなって、催涙弾を使わざるをえなくなりました。事態は時をおうごとに深刻になりました。守衛は威嚇射撃をしました。侵入者を空砲で動揺させようとしたのです。守衛たちは武器を使用することなく、ラジオ局から侵入者を追い出すために全てのことをやりました。一人たりともそれで重傷を負ったということとはなかったのです。しかし、群集の方から弾がどんどん飛んでくるようになりました。まず国家治安部隊の少佐、そして一時間ほどのうちに6人の兵士が射殺されました。それでも国家治安部隊はその時まで武器を使っていませんでした。グーテンベルグ広場方面から武装したちんぴらが乗った2台のトラックが到着してはじめて、守衛の多くが殺されたり傷つけられたりしていたので、反撃するよう命令を受けたのです。我々の放送局の職員も群集の思いのままにならないように心がけました。挑発者たちはわがコシュート放送をだまらせることができませんでした。ラジオをお聞きの皆さん。たしかに、当初の放送予定とはだいぶ違ったことになりましたが、ハンガリーのラジオ局であるコシュート放送は健在です。反革命グループは私たちの放送を中断させることに失敗したのです。

〔体制側はナジ・イムレの首相就任とソ連軍部隊の投入を中心として事態を切り抜けようとしている。つまり、民衆運動にある程度譲歩しながら、民衆の急進的部分を「ファシスト」「ちんぴら」呼ばわりして、ソ連軍の介入を正統化しようとしている。ナジの中心として、ソ連軍＝友人、急進派＝敵というイメージを作り出しているし、⁽⁷⁾ そのイメージにそった放送内容となっている。また女性の男性に対する情愛を利用するような放送もされているし、ナジを支持する労働者の発言も放送されている。また、18時50分には母親が精神錯乱に陥ったから闘争をやめるよう息子によびかける父親の声が放送されたり、19時17分にはカトリック教会から闘争中止の呼びかけがなさ

れるなど、硬軟両面から切り崩しのためにあらゆる方法が体制側によってとられていることがわかる。]

10月25日 木曜日 [体制内改革]

[ソ連指導部のミコヤンとスースロフが在ブダペシュトソ連大使アンドロポフとともに、ハンガリー党指導部と会談し、そこでゲレーの第一書記解任とカーダール就任が決まったとされる。このゲレーが第一書記を解任され、カーダールがこれに代わったというラジオ・ニュースは正午すぎに流された。だが、民衆反乱はこの間に全国的に拡大した。この日ブダペシュトでは、国会前で治安警察の銃撃により数百人の民衆が死亡している。]

6時23分 警告します！警告します！閣僚評議会は軍隊、国家公安機関、武装労働者警護団、そしてソ連軍部隊は25日未明、反革命一揆を鎮圧しました。
・しかしながら、すべての学校、大学は当分のあいだ閉鎖されます。

12時32分 今日の会議でハンガリー勤労者党中央委員会政治局はゲレー・エルネーを中央委員会書記から解任しました。かわって、カーダール・ヤーノシュ同志が中央委員会第一書記に任命されました。（この放送は何度も繰り返され、そして、「ハンガリー人の皆さん。国旗を掲げてください。」と放送。）

18時45分 「青年の皆さん。友人の皆さん。いま話しているのはデュラ・ハイです。私は、君たちの仲間です。一緒に手に手を取りあってブダペシュトの街頭を行進しました。・・・私たちの要求の最も重要なものは実現しました。ナジ・イムレはわれわれの味方ですし、彼のプログラムは私たちのプログラムでもあります。カーダール・ヤーノシュはラーコシによって監獄にいれられている時に学んだのです。なにからハンガリーを守らなければならないのか、を。君たちの頭を悩ましていた勢力はゲレー・エルネーとともに政府を去りました。君らの国を思う気持ちは理解されているのです。報復を恐れる必要はありません。・・・もう君たち自身の命を大事になさい。祖国は君たちを今でも必要としているのです。個人的専横から解放されたこの新しいハンガリーがです。これが君らの年老いた友人である作家である私の言いたいことです。」

0時35分 ラジオをお聞きの皆さん。ナジ・イムレ同志の声明を今から読み上げます。「新政府である祖国人民政府がまもなく作られます。政府の顔ぶれは皆さんの要求や提案を最大限考慮したものです。新しい政府のプログラムの中には、皆さんのご要望が盛り込まれています。政府綱領は直に議会に提出されることになるでしょう。」

〔「反革命勢力」がソ連軍によって鎮圧されたという報道は繰り返されている。ゲレーが去ってしまったのだから闘争を止めようという内容がこの日の放送の中心になっている。〕

10月26日 金曜日 [嵐の前の静けさ]

〔労働者評議会がゼネストを開始する。勤労者党中央委員会が「繁栄・独立・社会主義的民主主義の自由な国をめざす政府をつくろう」という声明を発する。そこでは労働者評議会が承認されていた。〕

10時01分 政府は食料品を最寄りの店で買うのに、10時から15時の間外出することを許可します。ただ、内務省がくれぐれも注意するように呼びかけているのは、武器をもっている者は整理部隊によって撃たれるということです。15時以降は外出してはいけません。

夜0時5分 ブダペシュトの外出禁止令は撤回されるまで27日土曜日もつづけられます。午前10時までは必要な買い物だけをすませることができます。3人以上のグループをつくると撃たれます。

10月27日土曜日

〔反乱側がラジオ放送を開始する。「愛国人民政府」＝事実上の複数政党制政府が設立される。〕

10時 ブダペシュト市の評議会からのお知らせです。

ブダペシュトの街で流血の闘争がはじまってからきょうで4日目です。食料品の供給は非常に難しくなっています。ここ何日か市営工場では労働者が水道、ガス、そして電気を供給しようと命懸けではたらいっています。・
・市民になりかわり、お礼を申し上げます。そして今日も同じ様に働かれますよう信じております。」

11時8分 [閣僚名簿の発表]

12時 12時のニュースです。・・・ブダペシュト市をテロでおおっているグループの抵抗は打ち破られました。昨晚22時ころ、多くの反乱者たちが武器を差し出し、我が軍隊に降伏してきました。・・・ブダペシュトならびに地方都市の方々は、武装グループがブダペシュトや農村に政府や他の機関の名前をかたった声明などがのっているビラを配っていますから、間違わないようにご注意下さい。・・・ブダペシュトのこれから12時間の天気予報です。曇り、ところによってはわか雨。風は弱いでしょう。午後の気温は10度ないし12度。夜は7度から9度でしょう。

12時25分 労働組合全国中央委員会からのお知らせです。

「働く皆さん。労働者階級の要望が実現し、これから経営していくのは労働者評議会です。たったいまから、自分自身のものになったのですから、工場の所有者の気分をあじわうことができます。」

16時45分 (反乱側の手にあるミスコルツ放送) ミスコルツの反乱者に対して武器を使用した者は責任をとれ！昨日午前10時ころ500人の青年がデモをしました。・・・(雑音)・・・学生グループは警察庁にいて逮捕された学友の釈放を要求したのです。・・・そこに他の学生グループのデモがやってきて、・・・(雑音)・・・警察長官は警官に命令し、・・・(雑音)・・・機関銃の薬莖や種流弾の破片が、デモ隊がもっていた国旗やデモ隊に飛び散りました。

17時5分 ニュースです。ブダペシュトと多くの地方都市で、武装グループがビラを配っています。信じないでください。

17時15分 (パチュ放送-反乱側) 我々は断固としてナジ・イムレ同志に従います。でも、新しい運輸・郵政大臣がベブリッチュ・ラヨシュだというラジオ報道には納得がいきません。これまで国鉄内部で独断専行し、テロをもちこんだ人物だからです。

19時 (デル自由放送-反乱側) こちらはデル自由放送です。周波数188.5、ならびに223.8でお送りいたします。市民のみなさん。同志の皆さん。・・・私たちは、ブダペシュトと全国における国家公安局の解体を要求していま

す。国家公安機関は武装解除されねばなりません。武器はハンガリー人民軍の部隊に引き渡されるべきです。党指導部、ならびに政府は、ハンガリーに駐留する武装したソ連軍部隊に闘争を止めさせ、迅速な部隊の我が国からの撤退を確保することに着手すべきです。・・・我々は、デモをしていた労働者や青年に武器を使ってあたって者を心の底から弾劾します。我々は、闘争の犠牲者を殉教者とみなしているのです。

19時30分（ミスコルツ放送）こちらは、ミスコルツ放送です。・・・私たちの国民はナジ・イムレを信じています。私たちは、彼にソ連軍部隊をソ連に送り返して、ブダペシュトやその他でもはやハンガリー人の血が流されないようにお願いします。外国軍隊と国民の抑圧によってしか統治できないような政治家とは違うところを見せる勇気をもたれますように。

22時25分（ミスコルツ放送）お届けしていますのは、ミスコルツ放送の特別番組です。ミスコルツで労働者評議会と学生議会が指導権を握ってから今日で2日目です。・・・

22時45分（ミスコルツ放送）これからミスコルツの労働者と学生がソ連軍にあてた呼びかけの内容を読み上げます。（最初ロシア語で、次にハンガリー語で）

兵士・将校諸君。君らの兄弟であるハンガリーの労働者、学生そして青年に銃を向けないでください。君たちに反対することが目的で我が国民は立ち上がったわけではなく、その正当な要求を実現したいがために立ち上がったのです。・・・ハンガリー国民の正当な闘争を抑圧する道具にならないでください。ミスコルツの労働者と学生でした。

[当局側は動乱による物資の不足を伝え、投降が続いていることを報じながら、闘争を止めるように訴えている。そのトーンは、要求は実現したのだから闘争はもうやめようと、いったものである。他方反乱側は、一部閣僚への不満はありつつも、全体としてはナジ政権を歓迎している。そして、彼らが掲げた要求は、この間の流血の事態の責任者の処罰、公安機関の解体、ソ連軍撤退などである。]

10月28日 日曜日 [反乱側の攻勢]

[ナジ、戒厳令を撤廃するとともに、ソ連軍に撤退を要求し、それにしたがって撤退が開始される。]

10時50分 (デル自由放送) こちらはデル自由放送です。・・・労働者も女性たちも青年の味方です。国家公安局は実質的にもうなくなっています。その部隊は自壊しているのです。メンバーは制服を脱ぎ隠し持っています。外国のジャーナリストたちはソ連軍戦車が反乱側についてようなことも報道しています。

11時 (デル自由放送) この瞬間ソンバテイの住民は平和的デモを繰り広げています。人々は国旗を掲げ、「完全な民主的自由とハンガリーからのソ連軍の撤退」を要求しています。デモ隊は規律がこの上なく保たれています。

11時7分 (ラジオ・コシュート) ラジオをお聞きの皆さん。今から『自由な人民』の今日の社説を読み上げます。

「私たちは、最近数日間の事件を反革命的、ファッショ的一揆だと簡単に片づけるような見解をとらない。・・・事件はブダペシュトの学生の15万から20万人規模のデモによってはじまった。だが、これを単なる青年たちの運動だと見たことは大きな錯覚だった。ブダペシュトの青年たちは、全国民の心の底から込み上げてくる感情や気高く熱い情熱をあらわしていたのだった。我が祖国において全国民が加わり、一つに溶け合った巨大な国民的民主主義運動を展開したということを我々は理解しなければならない。そうした民主主義運動は、過去数年間の専制政治によって水面下に押さえつけられていたが、ここ数ヶ月の自由の最初の息吹から燃えさかる炎へと展開したのだった。・・・注目すべきはその後2日目、3日目になって、デモが公共の建物の前で開かれるようになったことである。『独立。自由。我々はファシストじゃない』というスローガンとともに。・・・真実は、闘争に参加した蜂起者の中でまじめな愛国主義者の数が非常に多かったことである。その中には、これまで社会主義的民主主義が与えられていなかった共産主義者も含まれていた。・・・世論はナジ・イムレの首相指名を心から信頼して歓迎した。しかし、ゲレー・エルネーが第一書記として発した決議が火に油を注いだ。ナジ・イムレの声明、ゲレー・エルネーの解任そしてカーダール・ヤーノシュの第一書記指名、新政府の成立に大衆は喝采を送った。しかし、反乱はつづき、

木曜日になって弱まった。抵抗は決してソ連軍が出動したから収まったのではなく、蜂起に立ち上がった民衆が民主的要求が達成されたと考えたからであった。」

〔最初は正当な要求だったが途中からファシストに先導されて動乱に発展した、という当初の当局側の見解がここに来て訂正されている。〕

10月29日 月曜日

〔国家公安局廃止〕

10月30日 火曜日 [運命の分かれ目・民衆運動の最高潮]

〔ソ連側、社会主義国間の完全平等、領土・主権の尊重、内政不干渉などを確認した『ソ連と他の社会主義諸国間の友好と協力の発展と一層の強化のための諸原則』を宣言し、ハンガリーにおけるソ連軍駐留の再検討を表明した。またナジは複数政党制復活を約束する。ミコヤン、スースロフ、3度目のブダペシュト訪問をし、ナジ政府の政策を支持し、複数政党制復活、自由選挙、農業生産協同組合からの脱退などをソ連側はいったんは承認した。〕

7時20分 こちらはコシュート放送ならびにペテーフィ・ブダペシュト放送です。ご注意下さい。重要なお知らせです。国防省は次のように伝えています。

「すでに報じられているように、ブダペシュトでは武装グループに対抗するソ連軍部隊の撤退がつづいています。ハンガリー軍、警察ならびに労働者と青年の武装団体の部隊は秩序を維持するという任務を引き継いだ。・・・ラジオをお聞きの皆さん。これからもブダペシュトのソ連軍部隊撤退のニュースをお伝えできるでしょう。」

10時15分 (ミスコルツ放送) こちらはミスコルツ、ボルショド・コンピナート労働者評議会放送局です。・・・ここ数日間ソ連の指導者は繰り返しワルシャワ条約を引き合いに出しています。この点について、我々が注意すべきは、・・・(雑音)・・・帝国主義部隊がハンガリーの領土にいないということは問題になっていません。・・・したがってワルシャワ条約の速やかなる修正を求めるものです。・・・

10時30分 (ミスコルツ放送) ・・・いくつかの例が示しているように、ソ

連はワルシャワ条約ばかりか国連憲章さえ乱暴に侵しています。ハンガリーにおけるこの闘争があるグループによる反革命だとしてたり、帝国主義者によって準備され展開されたとかいうのは正しくはありません。「革命は輸出もできないし、輸入もされえない」とレーニンは教えていますし、そのテーゼは今日でも有効性をもっているのです。いまハンガリー起こっているのは、反革命ではなく、国民のあいだに長年たまりにたまった自由への渴望がダイナミックに爆発したものです。・・・

12時（ミスコルツ放送） こちらはミスコルツ、ボルショド・コンビナート労働者評議会放送局です。10月24日夜からソ連軍は多くの部隊を我が国に送り込みました。なぜ新たにソ連軍が配置されなければならなかったのでしょうか。我々は、さらにソ連軍部隊を配備させることをやめさせ、ブダペストからのソ連軍撤退を保障する措置が即とられることを要求します。政府は国民に真実を告げその約束を履行すべきです。そうしてこそ我が国に安寧秩序が再び訪れるでしょう。

13時10分（自由デル放送） いまマイクの前で話してるのは、油田労働者が派遣したヨーンおじさんだ。・・・ソ連軍戦車に、わしらは一滴足りとも石油をやらねえ。政府が、できればナジ・イムレが個人的にコシュート放送を使って、誰がわれらの石油を使うのかははっきり言うまで、わしらは石油を掘り出さねえ。

14時28分 国民政府首相ナジ・イムレの演説をいまからお届けします。

「国民政府はソ連軍部隊司令官に速やかに部隊のブダペシュトからの撤退を開始するよう要求しました。同時に政府は国民に対してお知らせします、ソ連部隊のハンガリーからの撤退をはじめめるためのソ連政府との交渉がすぐに開始されることを。」

15時5分 ラジオをお聞きの皆さん。いまハンガリーのラジオ史上新しい時代が始まりました。長年にわたってラジオは嘘の道具でした。命令によってそうになっていたのです。日夜嘘のつきっぱなしでしたし、全ての電波を使ってその嘘が放送されたのでした。今日われわれの祖国が生まれ変わったこの時点で、嘘をつづけることはできません。街頭で自由と独立をかちとった闘争は、ラジオ局でも燃え上がったのです。嘘ばかりいていた者はこの瞬間

からコシュートとペテーフィの名に恥じないようになったハンガリーラジオ局の同僚ではもはやありません。・・・いまマイクの前にたっているのは、多くが新しい人間です。将来、従来の周波数では新しい声が聞こえることになるでしょう。私たちがお伝えしたいのは真実であり、本当のことですし、それ以外のものではありません。・・・ラジオ革命委員会でした。

15時40分 (サボルチュ=サトマル・コンビナートの労働者評議会放送局) ご注意ください。ご注意ください。閣僚評議会が国民に向けて呼びかけをし、ソ連軍司令官と交渉するかしないかのあいだに、ソ連軍部隊がブダペシュトから撤退していると報道されているのに、東の方向から〔ソ連国境から〕我が国の中心部の方向に向かってソ連軍が進軍して来ています。国民を馬鹿にするのもいいかげんにして下さい。何のために彼らはやって来ているんでしょうか。

17時55分 これから、ハンガリー軍全部隊に向けた宣言を読み上げます。

「ハンガリーの友人たちよ。仲間たちよ。我が軍隊は、栄光に満ちた革命の獲得物を守るために国民の側についている。我々が要求するのは、ソ連軍のブダペシュトからの即時撤退、ならびに近い将来における我が国からの完全撤退だ。国家公安局は我が軍隊に対してもテロで襲った。軍隊指導部の革命的軍事評議会はまだ武装している国家公安局の即時武装解除を決議した。陸軍大將レリツ・カーナ」

18時15分 (ミスコルツ放送) デブレツェンの社会主義革命委員会は次のことを要求しています。

- 1 ワルシャワ条約機構からハンガリーが即時脱退すること
- 2 ソ連の侵攻が我が内政問題を国際的事件にしまったので、効果的方法でハンガリー自身の問題として処理するよう国連に依頼する。
- 3 スターリニストの国連代表ケースを国連から召喚することを要求する。
- 4 平和的秩序が回復されるまで我々は政府を臨時的なものとし、ソ連撤退後にハンガリーで多党制に基づく自由・民主・秘密選挙をとりおこなうべきこと。
- 5 我々の要求実現まで我がコンビナートの労働者は座り込みストを続ける。

20時10分 (自由コシュート放送) ハンガリーの演劇関係者は、最後のソ連

軍兵士が我が国から撤退するまで、舞台をあげようとはしていません。

20時50分（ペテーフィ・デル自由放送）閣僚評議会からのお知らせです。

「ハンガリーの皆さん。私たちの苦悩、私たちの羞恥心、そして情熱は、2つの指令によってかきたてざるをえなくなっています。そのため何百何千もの血が流されなければならなかったのです。一つは、ソ連軍部隊への出動要請ですし、もう一つは、解放戦士に対する恥知らずの戒厳令下の即決裁判です。私たちの歴史的責任を自覚して、私たちはナジ・イムレがこの両方の決議に関与していなかったことを確認しています。閣僚評議会のこの2つの決議のどちらにもナジの名前はありません。この2つの措置は、アンドラス・ヘゲデュシュとゲレー・エルネーによるものです。かれらこそ国民と歴史の前でその責任をとるべきなのです。」

[放送関係では15時に今までの当局側放送局が自己批判をしていることが目を引く。ワルシャワ条約機構修正の問題が提起されるようになっており、17時55分にはハンガリー軍の陸軍大将もソ連軍の撤退を要求しており、民衆対軍という対立構造ではなくなっており、ハンガリー対ソ連軍といった構造になっている。そして対立の焦点はソ連軍の撤退に収斂していつている。]

10月31日 水曜日 [晴れのちくもり 解放の幻影 束の間の解放]

[未明、ソ連当局、ハンガリーへの軍事介入、ナジ政府打倒を最終決定。]

4時49分（自由コシュート放送） 昨晚、社会民主党中央が活動を再開したという連絡が私たちのところにありました。国民農民党は今日の午後集会をもつことになっています。

8時（自由コシュート放送） ニュースです。今入ったところによりますと、ソ連部隊がブダペシュトから撤退を開始したということです。

11時55分（自由コシュート放送） 現在各方面から要求されてきているのは、国会議事堂正面の赤い星マークを速やかに撤去することです。ただし、撤去には、国会議事堂自体を傷つけないようにする、しかるべき技術的準備が必要でです。それまで、ハンガリー国旗で赤い星を隠すように提案します。

13時17分 (ラジオ・ミスコルツ) ご注意下さい。ラジオをお聞きの皆さん。昨日最初、ジュコフ元帥がソ連軍部隊にハンガリーから撤退するよう命令した、とハンガリー国民は聞きました。そして、実際にソ連軍の撤退が始まったと放送もしました。しかしながら、わけのわからない理由から、高射砲部隊、戦車部隊をふくむ相当数のソ連軍部隊が進路を変えました。再びソ連軍は我が国に侵攻しています。

16時 (ソムバテリ自由放送) ナジ・ラヨシュ高校の生徒は、ハンガリーがスイスのように中立になることを要求しています。

17時2分 (コシュート自由放送) 中央国家防空革命委員会はオーストリアを模範としてハンガリーを中立国家にするように要求しています。

18時 (コシュート自由放送) 今日の労働組合全国評議会特別会議の席で、従来の指導部は退陣しました。自由ハンガリー労働組合全国評議会の臨時執行委員会がそのあとを継ぐことになりました。臨時執行委員会は、旧指導部下にあっては冷遇されたり投獄されていた労働組合指導者と、新しい革命的労働組合指導者からなっています。

22時 (コシュート自由放送) ハンガリーのラジオ放送が外国から妨害されないように措置をとれ、というご希望が私どものところに届いております。私たちコシュート自由放送局も、電波を通した言葉とイデオロギーによる闘争をだれたりとも妨害すべきではないという意見です。…というのも、当局側からの情報によれば、従来ハンガリー領にあった妨害電波基地は例外なく放送を中止しているからです。つまり妨害電波は我が国から発せられたものではないのです。

23時35分 (ミスコルツ放送) ミスコルツの中学校の生徒会は、つぎのことを決議しました。・・・3. ソ連にいるハンガリー人の戦争捕虜と他の捕虜の即時釈放。・・・7. ソ連側空のクレジット提供の拒否・・・19. 学校での歴史教育は現実政治から独立したものであること。

[政党化活動の自由化に沿って反対党派の活動が開始されているが、むしろ問題は、おそらくはソ連側からの妨害電波によってラジオ放送が混乱させ

られていることと、民衆のあいだではちょうどこれと前後した時期に中立国となった隣国オーストリアの状況を見て、ハンガリーの中立要求が高まっていることがわかる。]

11月1日 木曜日 [暗転]

[ソ連軍本格介入開始。ナジ、ソ連軍侵入に抗議してワルシャワ条約機構からの脱退、中立を宣言。午後遅くアンドロポフにナジは最後通牒し、そこで「わたしはハンガリー人だ。必要なら素手でもあなたがたの戦車と戦う」と主張した。またナジは国連事務総長ハマースホルドに、ハンガリーの中立確保のために4大国の援助を要請した。他方カーダールにより社会主義労働者党が結成される。その後夜からカーダールはハンガリーから姿を消し、ソ連空軍機でウクライナのウジゴロドに飛ぶ。]

14時15分 (コシュート自由放送) ご注意下さい。重要なお伝えがあります。本日午前11時、国会議事堂においてブダペシュト大学学生革命委員会、ハンガリー知識階級革命委員会、自由ハンガリー労働組合全国同盟執行委員会幹部、国民政府代表は、会合をもちました。そこでは国民革命の政治的経済的状況について話し合われました。

17時10分 (コシュート自由放送) 独立小農民党の女性組織は次のような呼びかけを発しています。ハンガリーの皆さん。幼い孤児をみつけだして下さい。両親が闘争の犠牲になった三才までの孤児を。帰る家がないようであれば、独立小農民党女性組織の社会部局に申し出てください。寒い冬が近づいています。それまでに、孤児となったハンガリーの子どもたちに屋根のある暖かい部屋を用意しようではありませんか。

17時45分 (コシュート自由放送) ネーメット・ラースロ (作家) の「国民の蜂起」という詩をお送りします。

「13年前に最後に若い知識層と会って話した時、私の時代は終わったと思った。しかし、今私は、私を乗せた自動車でブダペシュトにやってきて、部屋に閉じこもって力の限りタイプライターを鉄砲のようにカチャカチャいわせている。タイプライターの前に腰掛けながら考えているのは、カルヴィン広場に面した建物の屋根にあがったその少女のことだった。男達が次から次へと倒れていっている時、死にいたるまであくまで機関銃を手にもった。

こう言ってもいいかわからないが、私の心の中でこの少女は今や芸術の神ミューズである。彼女は屋根のほうから私に手を振って、『早く。老いばれの死にそこない。私が私の若い命を投げ出してる時になぜ哀れな老人であるお前はぼーっとしているのだ』と言っているように思えた。」

18時12分 (コシュート自由放送) 閣僚評議会議長で現職の外相ナジ・イムレは、今日の午前中、駐ハンガリーソヴィエト大使アンドロポフに会見を申し入れました。ナジがアンドロポフに語ったところによれば、ハンガリー人民共和国政府は、新たにソヴィエト軍勢力がハンガリーに侵攻しているという見逃しえない情報を入手したということでした。ナジはこうした部隊の即時撤退を要求しました。さらにナジはソ連大使に、ハンガリー政府はワルシャワ条約機構を即時脱退することを告げ、同時にハンガリーの中立を宣言し、国連に対して4列強がハンガリーの中立を保証するように申し入れた旨を伝えました。・・・同時にナジは国連総長に電報で、ハンガリーの事態に対して、またハンガリー政府の決断についての理解を求めました。さらにナジは国連に、この問題を緊急に議事日程にするように申し入れました。

19時50分 (コシュート自由放送) ハンガリー人民共和国の首相兼外相であるナジ・イムレが、ハンガリー国民に対してお話があります。

「ハンガリー国民の皆さん。私は責任を痛感しながら、ハンガリー国民の皆さんと歴史からの要請に押されて、またハンガリー国民の心からの願いに応じて、ハンガリー国民政府はハンガリー人民共和国の中立をここに宣言するものです。国連憲章がいうところにしたがい、ハンガリー国民は、独立と対等平等をもとに、隣国であるソヴィエト連邦とも世界の全ての諸民族と、真の友好関係を築きたいと考えています。わたしたちは、なにがしかの軍事同盟に組することなく、わが国民革命の成果を確固たるものとし、さらに発展させていくことを願っているものです。こうしてこそ100年来のハンガリー国民の夢が実現するのです。」(国歌演奏)

20時37分 (コシュート自由放送) 今からカトリック国民党議長のヴァルガ・エンドレのお話をお届けいたします。「8年間におよぶ地下闘争を経て、カトリック国民党がコシュート自由放送を通して、全ハンガリー国民の皆さんにご挨拶を申し上げます。・・・」

20時53分（コシュート自由放送） われわれのレポーターが解放戦士とインタビューしました。

「最年少の方をまずご紹介したいと思います。ヨースは16才でバカーチ広場の病院の英雄です。彼は解放戦士『コルヴィン』隊のメンバーです。彼の顔の深い傷の痕はまだ痛々しいままです。」「最初俺たちはラーコシ通りで戦っていた。あそこじゃ、ソ連軍戦車が砲撃してた。・・・金曜の朝5時まで俺たちはメスター通り一番地の家にいた。そこをロシア人たちは戦車で砲撃しやがった。そしてこんな傷を俺はおったのさ。散弾が両足と顔にあたったという訳さ。若いのが息もたえだえの俺をこの病院に担ぎこんだのさ。」

「なんで解放戦士になったんですか。」

「1848年われわれの解放戦士たちは抑圧に反対して立ち上がった。我が祖国に外国の抑圧者の部隊がいることがたえられなかったんだ。」

22時（コシュート自由放送） 今からカーダール・ヤーノシュの演説をお送りいたします。「ハンガリーの労働者、農民そして、知識層の皆さん。運命的瞬間にわたしは皆さんにお話しています。我が党を専横と国民を奴隷にする道具にしたのは、ラーコシ、ゲレーといったスターリン主義者の盲目的そして犯罪的政策でした。・・・これまで暴君ラーコシに反対する闘争を呼びかけていた共産主義者たちは、新たな党の創設を決議しました。新しい党は過去の過ちと完全に断絶したものです。われわれの党は新しく「ハンガリー社会主義人民党」という名前になりました。

23時20分（コシュート自由放送） ブダペシュトのソ連大使館が伝えているように、ソ連の戦車部隊は各地のハンガリーの飛行場を包囲しています。そうすることで、ソ連軍家族や負傷者の帰路を確保しようとしているのです。ハンガリー空軍は戦う用意があります。ただ、政府は不測の事態が起こらないように、戦闘開始を禁じています。ハンガリー空軍部隊も規律正しくソ連軍部隊と対峙しています。一発の銃弾も使うことなくソ連軍部隊が撤退していくのを期待しているのです。

〔民衆が果敢に闘う様子が放送されているが、勝つ見込みのない絶望的響きも感じられる。闘争は継続され、国民党などの反対党派の活動も本格化していることが察せられるが、カダールのハンガリー社会主義人民党は、ラーコシやゲレーに対する対抗から設立されたように、説明されているので、そ

の性格は分かりづらいし、民衆の間には恐らく混乱がその性格をめぐっての混乱が広がったことは想像できる]

11月2日 金曜日 [国連への期待]

19時15分 (コシュート自由放送) 国連事務総長様。ハンガリー人民共和国閣僚評議会議長でもある私は、外相として次のような事情をお伝えしたいと思います。11月1日の書簡の中で私はすでに、ハンガリーに向かって新たなソ連軍部隊が侵攻していること、これに対してハンガリー政府はソ連大使に対してワルシャワ条約を脱退し、ハンガリーが中立国になることを宣言したこと、そしてそのハンガリーの中立を保証するために国連に要請したとご説明申し上げました。11月2日に、ハンガリー政府はさらに正確な情報をえました。それによりますと、かなりのソ連軍勢力が国境を越えてブダペシュト方面に向かっていくこと、そしてその途中で鉄道路線や駅舎などを占領しているとのこと。私は閣下をお願いしたい。大国がハンガリーの中立を承認し、安全保障理事会を通してソ連とハンガリー政府がすぐに交渉を開始するように指示されますよう。 ナジ・イムレ

20時45分 (コシュート自由放送) 国連総会に関する情報によればハンガリー情勢は今日か明日には安保理で協議されるだろうということです。アメリカの国務相ダレスはハンガリーの中立宣言に関する議論はきわめて重要であると語っています。今日にでもわが国にとって焦眉の重要な問題がある程度明らかにされることを期待しましょう。

[ナジは解決の方向を国連に求め、期待を込めていることがわかる。]

11月3日 土曜日

[ナジ内閣改造。共産主義者少数派内閣。労働者評議会と政府協定。評議会側11月5日からの労働再開を約束]

7時 (コシュート自由放送) ラジオをお聞きの皆さん。最近の最も喜ばしい現象といたら新聞を売るキオスクが色とりどりになっていることです。新しい新聞が今週いくつ出たかも宙にはわからないほどです。まだよく知られていない新聞もあります。でも人々は、永年の沈黙を打ち破り立ち上がった新聞を喜んで買っています。

8時5分 (シンバテリ自由放送) オーストリアの国家条約の署名をわたしたちは心から喜んでいますが、でも、本当のところちょっとだけ羨ましくも思っているのです。なぜわたしたちはそうできないのだろうか、とわたしたちは言っていますし、考えています。

9時 マレータ・パールは、ミコヤンが先週水曜日キス大臣と、ワルシャワ条約に基づいてハンガリーに駐屯しているソ連軍部隊は全て撤退されるという点で合意に達していたと宣言しました。しかし、ラジオ・ブダペシュトは今日これとは全く反対のことを伝えています。つまり、ミコヤンが最近、ワルシャワ条約機構に基づきハンガリーに駐屯している部隊を除く全ての部隊を撤退させると語っているというのです。

14時 (デュナペンテレ国民委員会自由放送) 全ての自由なハンガリー人の放送局に呼びかけます。ソ連の放送局や兵士にいうなりのプロパガンダがハンガリーにおける事態をファシストの流血事件だと報道しているという確実な情報を入手しました。危惧されるのは、非常に多くのソ連軍兵士がこうした中傷を信じることです。・・・そこでわたしたちがお願いしたのは、ロシア語とハンガリー語でこうした悪意に満ちた噂に繰り返し反駁することです。

19時35分 (ペス自由放送) ソ連軍部隊がわが街に接近している。バランヤ・コンビナートの労働者評議会の代表は乗りこんで、ソ連側に伝えた、我々が平和を望んでいて街のことに干渉されることを願っていない、と。

[民衆側を「ファシスト」とみなすソ連側の報道に対してそれを否定するハンガリー側との間で情報戦が展開されていることがうかがえる。]

11月4日 日曜日「助けてください。」

[ソ連軍は戦車、装甲車、歩兵を投入してブダペシュトへの本格的攻撃を開始した。結局この介入による死者は3000人、亡命は20万人に及んだ。ナジは、5時19分に最後の放送をした後、家族や友人とともにユーゴスラヴィア大使館に逃れる。カーダールは、ソ連領内ウジゴロドに労農革命政府を樹立する。]

5時20分 (コシュート自由放送) 警告、警告、警告、警告。こちらはハン

ガリー人民共和国閣僚評議会のナジ・イムレです。今日朝霧の中でソ連軍部隊が我が首都に向かって攻撃をはじめました。合法的なハンガリーの民主政府を打倒することを目的に。我が部隊は戦闘中です。政府は大丈夫です。このことを私は国内の住民と世界に向かって伝えるものです。(このニュースは5時35分には英語で放送され、それから2分毎に英語、フランス語、ドイツ語、ハンガリー語そしてスラヴ系言語で繰り返された。)

5時56分 (コシュート自由放送) 警告、警告、警告。国民政府首相ナジ・イムレは、国防相マレーター・パール、参謀本部長コヴァース・イシュトヴァーンならびにソ連軍事司令部の招きに応じて昨晚10時すぎに出掛けてそのまま帰ってきていない軍事代表団メンバー全員に呼びかけています、すぐに帰還して職務に復帰するように。繰り返します。

7時14分 (コシュート自由放送) 警告、警告。今から重要な伝達事項を読み上げます。「ハンガリー政府はソ連軍将校、兵士に対して発砲しないよう説得しています。流血の事態を避けましょう。ロシア人は我々の友人ですし、そのままでありつづけるでしょう。」

7時57分 (コシュート自由放送) 警告、警告。ラジオをお聞きの皆さん。今からハンガリー作家同盟からの訴えを読み上げます。「世界の全ての作家諸君。全ての科学者の皆さん。全ての作家団体、アカデミー、科学者組織の皆さん。そして精神的活動に指導的役割を果たしている皆さん。わたしたちを助けてください。時間はもうありません。事実はもう明白で、別に付け加えることもいらないでしょう。ハンガリーを救ってください。ハンガリーの人々を救ってください。ハンガリーの作家、科学者、労働者、農民を救ってください。助けて。助けて。助けて。(訴えは英語、ドイツ語、ロシア語で繰り返された)

8時15分 (1187キロヘルツの確認できない対抗政府の放送番組。ハンガリー国外からという可能性もある。)
「ご注意ください。こちらはフェレンク・ミュニヒです。ハンガリーの勤労人民つまり愛国者、労働者と農民の兄弟に向けた公開状を紹介します。この公開状に署名をしているのは、アプロー・アンタル、カードール・ヤーノシュ、コーサ・イシュトヴァン、ミュニヒ・フェレンクといったナジ・イムレ政府の国務大臣だった者たちです。私達は、

11月1日ナジ政府との関係をいっさい断ち切り、政府を去り、そしてハンガリーの革命的労働者農民政府の創設しようとしたことをお伝えいたします。

この責任ある文書に関して発表するにいたったのは、反動の圧力に屈してどうしようもなくなったナジ・イムレ政府が、私達の人民共和国と我々の労働権力の社会主義的獲得物が危険にさらされ、しだいに勢いづく反革命の危険に対処する何らの機会を私達に与えなかったからであります。」

10時3分（ラジオ・スモバテリー。すでに民衆の手を離れている）警告、警告。いまから軍事司令部の命令を読み上げます。

「最近市町村官庁が秩序と安全をまもれないことが立証された。犯罪分子、挑発者たちがハンガリー住民の平和な生活を邪魔している。・・・彼らは卑劣なやり方でソ連軍兵士を不当に取り扱い、殺している。そこでわたしは次のように命令する。武器を所有する者はすぐに武器をソ連軍司令部に引き渡すよう。この命令に従わないものは厳重に処罰されること。経営の勤労者は仕事を始めること。この命令は、秩序と安全が回復するまで全ての市民と官庁に適応されること。

11時（ラジオ・スモバテリー。軍事司令部の命令が繰り返された後で。）「反革命的ファッション的一揆は、民衆の反撃にあって挫折した。人民権力は最終的に勝利したのである。」

12時23分（不明のハンガリー語放送）警告、警告。皆さん。私達はハンガリー革命に対するあなたたちの助力を求めています。数百台のソ連軍戦車がハンガリーの首都を攻撃しています。助けてください。

13時03分（不明電波。受信状態が悪い）世界は我々のことを繰り返し繰り返し思い出すだろう。文明世界はこのひどい破壊と殺戮を見逃すことはできない。・・・小国・・・平和的共存・・・世界の大国ソ連・・・新たな奴隷の生活が始まる…仮面をとった兄弟…12年後我々の最後の苦々しい教訓…

13時12分（不明電波）警告。国連への訴え。今日2時30分ソ連軍部隊はハンガリー国民に総攻撃を開始した。国連にハンガリーへの即時救援を我々は要求する。そして世界中のまじめな人々に訴える、我々を助けて、と。

13時55分 (不明電波。ドイツ語で) 警告、警告。国連への訴え。私たちは国連に即時軍事援助を要求します。こちらは残された最後のハンガリー放送局です。

23時47分 (ラジオ・コシュートー民衆側から離れ、名称ももともどっている) ハンガリーの革命的労農政府の国連総長にあてた11月4日づけ手紙を読み上げます。

「ハンガリー政府の名において、私どもは国連に向けて、ナジ・イムレが国連に対して行なったハンガリー問題に関する提案は、ナジ・イムレがもはやその役職にない以上、その法的根拠を失ったと伝えます。革命的労農政府は、この問題が安保理ないしは国連総会で話し合われることに反対します。なぜならば、このことが、純粋にハンガリー人民共和国の内政問題だからです。革命的労農政府大統領カーダール・ヤーノシュ。外相イムレ・ホルバート。

11月5日 月曜日

15時10分 (ハンガリー・ラーコシ放送一反乱側) ハンガリー国民の皆さん。ニュースをお伝えします。ハンガリーの首都では、戦闘が続いています。首都に侵攻したロシア軍部隊を我々はいたるところで包囲しました。ロシア軍戦車は結集して進んでおり、街の各所にはバリケードがつくられ、激しい戦闘が続いています。

22時15分 (ラジオ・コシュート) [東ドイツ大統領] ヴィルヘルム・ピークはカーダール政府にあいさつ電報を送りました。フランス共産党はハンガリーの事態に対する声明を発し、その中でナジ・イムレが反逆的手法によってファシヨの要素を政府に持ち込んだ、と述べています。中国共産党は書いています。ハンガリーがファシズムへの道を歩むことをソ連は黙って見ていられなかった、と述べています。

23時15分 (ブダペシュトのアマチュア放送局、ドイツ語で) 抵抗は続いています。もう言葉はいりません。いるのは、早くに大量の武器と弾薬です。

11月6日 火曜日

10時35分 (ハンガリー・ラーコシ放送、ドイツ語で) ジュネーヴの国際赤

十字への訴え。国連の声明にもかかわらず非武装の人々や女性、子どもへのソ連軍の攻撃はつづいています。ソ連軍は赤十字の施設をも攻撃しています。

14時52分（ハンガリー・ラーコシ放送）・・・こうした状況のもとで私達は世界の良識に訴えます。スエズ運河が失われるかもしれないということはイギリスやフランスにとってどうでもいいことではありません。だから、すぐに国連は警察部隊を派遣したのです。しかし、数千年ものあいだ自由のためにずっと血を流し続けてきた小国はその自由を失ってもいいのでしょうか。なぜ大国の利害だけが重要なのでしょうか。我々の病院や学校、そして国宝だって重要なのではないのでしょうか。なぜそんなのは爆弾と火の犠牲になってもいいのでしょうか。なぜ君らは我々の殺害された女性や子どもたちの助けをよぶ叫びを聞かないのです。世界の人々よ。一つの小国の国民の助けを聞いて下さい。・・・我々はファシストなんかじゃありません。・・・

16時5分（ハンガリー・ラーコシ放送）警告。早く行動しろ。最終期限が近付いている。それが終わるとソ連軍の一斉攻撃が始まる。覚悟はできてる。攻撃を待つだけだ。パラシュートで武器・弾薬を投下してくれ。早く。行動せよ。

[スエズ動乱に対しては機敏な反応を見せた国連に対して、自分たちは見捨てられた、と薄々気づき始めていることがわかる。]

11月7日 水曜日 [最後の自由な放送]

[カーダール首都帰還]

14時5分（ハンガリー・ラーコシ放送）こちらはハンガリーのラーコシ放送局です。ハンガリーに武器援助をお願いします。・・・私達は巨大な大国と闘っているのです。この放送局ももうじきに破壊されるでしょう。でも、私達はパルチザンとして戦いを続けます。このニュースが最後になるかも知れません。

14時53分（ハンガリー・ラーコシ放送）警告、警告。こちらはハンガリーのラーコシ放送局です。ソ連の戦車と飛行機が攻撃を始めました。容赦なく攻撃が続いています。放送をいったん中止します。・・・（これ以降、ラーコシ放送局からは二度と放送がなかった。）

〔この後11月14日に「大ブダペシュト中央労働評議会」が結成され、ナジの首相復帰、一党独裁の廃止、ソ連軍撤退までゼネストをするよう呼びかけるが16日に中止せざるをえなくなる。一方ナジはいったんはユーゴスラヴィア大使館に逃げ込んだが、その後11月22日カーダールが差し向けたバスに乗り、その直後おそらくはソ連側に逮捕された。その後1958年6月17日になって『プラウダ』紙上でナジが処刑された記事が掲載される。〕

小 括

1956年10月ハンガリー動乱は、民衆のラーコシ、ゲレーの抑圧体制に対する糾弾と、言論の自由をはじめとする民主化要求からはじまった。ゴムウカの復帰という形で非スターリン化の先鞭をつけたポーランドの動向がそこでは大きく作用していた。そうした民衆の要請に支えられてナジ・イムレは登場し、ソ連側もいったんはポーランド型解決への道を歩むことになった。

民衆は自由を謳歌し、それまでの戦後の押し付けられた「社会主義」から、自分たちハンガリーの独自の道を模索しはじめた。労働者評議会もラジオ放送をはじめたが、そこでの要求は急進化していった。そして、そこに障害として立ちはだかったのは今度はソ連であった。だが、この点では国民は一体となっていたことがラジオ放送からも察することができる。ハンガリー対ソ連という図式が生まれ、その意味では「社会主義国家間の最初の戦争」だという後日の評価も過大ではない。こうした中で最初カーダールがラジオで登場する時にも、ナジへの批判はなかった。それが出てくるようになったのは事態が決定的になってからである。ソ連軍の介入にハンガリー国民は戦いながら、オーストリアを念頭においた中立構想なども提起された。しかしこうしたさまざまな民衆側の要求は戦車とともに踏みにじられたのであった。国際連合への救援の要請も空しかった。孤立した中でまさにハンガリー民衆の声は潰されていったのである。

注

- (1) ハンガリー動乱の基本文献としては、F.A.Vali, *Rift and Revolt in Hungary*, Cambridge 1961. P.E.Zinner, *Revolution in Hungary*, New York 1962. M.Molnar, *Budapest 1956*, London 1971. B.Lomax, *Hungary 1956*, London 1976. などがあげられる。とくにラスキーが編纂した豊富な史料集『白書』などは、英語版、フランス語版、スペイン語版も出ており、ドイツ語版の出版に際しては、ドイツ社会民主党

系の労働運動史研究者レーヴェンタールが尽力し、ヤスパースが序論を寄せている。M. J. Lasky, *Ein Weissbuch, Die ungarische Revolution, Die Geschichte des Oktober-Aufstandes nach Dokumenten, Meldungen, Augenzeugenberichten und dem Echo der Weltöffentlichkeit*, Berlin 1958.

その他に、N.Barber, *Seven Days of Freedom*, London, 1973. *The Hungarian Revolution of 1956 in Retrospect*, London 1978. *The First War between socialist States*, New York 1984. P.Goszony, *Der ungarische Volksaufstand in Augezeugenberichte*, Rauch 1966. なども出版されている。

日本でもハンガリー動乱については当初から関心が高く、フェレンツ・フェイト著、村松剛他訳『民族社会主義革命—ハンガリア10年の悲劇』近代生活社 1957年などが出された。その後出された本としては、同『スターリン以後の東欧』岩波書店 1978年。木戸蓊『激動の東欧史、戦後政権崩壊の背景』中公新書 1990年。鹿島正裕「ハンガリー動乱再考」菊池昌典編『社会主義と現代社会 2 社会主義の現実(1)』山川出版社 1989年。鹿島正裕『ハンガリー現代史』亜紀書房 1979年。F.フェイト(いわな・やすのり訳)『ブタペスト蜂起 1956年—最初の反全体主義革命』窓社 1990年。鹿島正裕「スエズ危機とハンガリー動乱」歴史学研究会編『講座世界史 9 解放の夢 大戦の世界』東京大学出版会 1996年などがある。

- (2) 南塚信吾「ハンガリーの社会主義『過去と現在』」、永井清彦・南塚信吾『社会主義の20世紀1』日本放送出版協会 1990年、206-207頁。ただ、これまで解明の中心は、ハンガリーといっても、首都ブダペシュト付近の動きで動乱全体が代表されてきたし、その中でもいわば政治指導部レベルが考察の中心であった。南塚氏などは、農村世界からとくにその共同体「タニャ」から見た歴史の再構成を試みている。南塚信吾『ハンガリーの改革—民族的伝統と「第3の道」』彩流社 1990年。
- (3) *Die ungarische Revolution 1956, Rundfunk - Dokumente unter besonderer Berücksichtigung der studentischen Bewegung*, München 1956.
- (4) 木戸蓊『東欧の政治と国際関係』有斐閣 1982年。木村朗「ソ連=東欧関係の歴史の変遷とペレストロイカ」高田和男編『ペレストロイカ—ソ連・東欧圏の歴史と現在』九州大学出版会 1991年。とくにこの間のハンガリーの動向については、羽場久滉子「ハンガリーの占領と改革」油井大三

・中村政則・豊下梢彦編『占領改革の国際比較』三省堂 1994年 332-369頁に詳しい。

- (5) 伊東孝之「東欧革命と非スターリン化」伊東・木戸編『東欧現代史』有斐閣 1987年
- (6) ブダペシュトの工科大学の学生たちが要求した16項目とは、①平和条約の規定にしたがい全ソ連軍の即時撤退。②ハンガリー労働者党の末端からトップにいたる新たな指導者の秘密選挙による選出。党会議の速やかなる招集と中央委員会を新たに選出すること。③ナジ・イムレ同志を首班とする内閣改造。スターリン・ラーコシ時代からの犯罪的指導者の解任。④ラーコシ、ファルカーシュとその同伴者の犯罪行為を裁く人民裁判所の設置。⑤政党活動の許可と新たな国民議会選出のための普通・自由・秘密選挙の実施。労働者のストライキ権の復活。⑥完全平等、内政不干渉の原則に基づいたソ連邦やユーゴスラヴィアとの政治・経済・文化的関係の再編。⑦専門家による全経済システムの吟味と再編。⑧貿易協定とソ連邦への実際の賠償支払いの公開。ソ連邦へのウラン譲与の事実確認と外貨と引き換えのウラン輸出の解禁。⑨工業部門の出来高ノルマ完全なる修正。労働者・インテリ層の要求に応じた賃金の即時根本的調整。労働者の最低賃金の制定。⑩農業供給システムの再編と収益の合理的利用。個人農家を平等に扱うこと。⑪独立した法廷による全ての政治裁判の吟味。無実の受刑者全員の釈放。ソ連邦に連行された戦争捕虜、市民の即時帰還。⑫良心・言論・出版の自由の復活。⑬「暴政と抑圧の象徴」たるスターリン像撤去。1848・49年革命の解放戦士の記念碑の建設。⑭国民になじみのない今の紋章に代わって、旧来からのハンガリーのコシュート紋章の復活。⑮ポーランドの労働者・青年との完全な連帯。⑯10月27日の青年集会の招集。10月23日のベム記念碑前の献花。K.Lehmann, *13 Tage erschütterten die Welt, ein Dokumentarbericht von der ungarischen Revolution*, München 1957, S.5-6.

鹿島氏はこれら学生の要求を14項目としているが、他の研究書では16項目になっている。(前掲鹿島「ハンガリー動乱再考」58-59頁)

- (7) S.Keen, *Faces of the Enemy*, 1986. 邦訳サム・キーン(佐藤卓己・佐藤八寿子訳『敵の顔—憎悪と戦争の心理学』柏書房 1994年)